

復興の明かり 僕らもとす

「ロボフェスタ2011 頑張れ福島」省エネ技術競演

福島県と首都圏の中学生らが混成チームを組んでロボットを製作し、性能を競い合う「ロボフェスタ2011 頑張れ福島」(NPO法人＝特定非営利活動法人、国際ロボフェスタ協会主催)が3～5日、東京都千代田区の科学技術館で開催された。会場となった東京都千代田区の科学技術館では5日、計17人の生徒らが「省エネ」をテーマにロボットを組み上げ、熱戦を繰り広げた。

「うおー。速えー」。元気な声がかかります。競技は5チームがそれぞれ2台のロボットを使って紙コップを積み上げ、東日本大震災の復興へのメッセージを書いたタワーを建設する。規定の消費電力量を超えるとロボットへの電力供給が止まり、節電できればその分ポイントが加算されるルールだ。

「地震後の電力不足が続く中、電気の大切さを実感してもらいたかった」と大会の実行委員長、村松浩幸信州大准教授は語る。

今回は福島県から福島市立渡利中、伊達市立松陽中の生徒10人が参加した。両校は福島第1原発から約60kmの位置にあり、付近の除染が完了する6月末まで、校舎の窓を締め切って授業を実施。校庭も使えず、部活動もままならない日々が続いた。生徒たちの元気と笑顔を取り戻

すため、ロボフェスタへの参加を決めたという。

ロボフェスタは全国各地から集まった初対面の中学生同士が3日間、同じ目標

に向けて作業に当たる。いや応なく親近感、チームワークが生まれ、それはいつしか絆となる。「首都圏の生徒に『地震に負けるな』と励まされた。福島に戻

ても頑張れそう。ものづくりの難しさ、楽しさも学べた」。渡利中3年、藤田和美さんはそう語る。

技術立国・ニッポン。その将来を担う子供たちの目は、キラキラと希望に輝いていた。



中学生らが創意工夫をこらした熱戦を繰り広げた「ロボフェスタ2011 頑張れ福島」＝5日、東京都千代田区

主催 NPO法人 国際ロボフェスタ協会
運営 RoboFesta2011 頑張れ福島!実行委員会

特別協賛 山崎教育システム(株)
後援 三菱総合研究所・フジサンケイビジネスアイ

桃島せんべい

- 菅野達彦(伊達市立松陽中)「ロボット製作を通じて友達との絆の大切さを実感した」
- 藤田和美(福島市立渡利中)「紙コップの並べ方が難しかったが、ものづくりは楽しかった」
- 荻野雄大(八潮市立八幡中)「いまいちうまく動かなかったが、楽しかった」
- 小林杏樹呂(八潮市立八幡中)「しっかりと紙コップを積み上げられた。みんなの協力のおかげ」



Catch The Victory

- 岡直人(伊達市立松陽中)「ずっと参加したかった。本場ではロボが暴走した」
- 斎藤彰人(福島市立渡利中)「冷静に操縦できた。ただ、試合中の故障が多かった」
- 半沢悠音(福島市立渡利中)「地域が違う中学生の頭脳を結集し、素晴らしい物を作れた」
- 大木碩仁(八潮市立八幡中)「想像以上にうまく作れた。失敗もあったが諦めなくて良かった」



埼玉福広(さいふっこう)

- 佐藤廉(伊達市立松陽中)「節電が大事だから、省エネを重視した。他県の人との作業も面白かった」
- 清野優美(伊達市立松陽中)「みんなと協力できてうまかった。試合の時間制限で『時は金なり』を痛感した」
- 荻野優生乃(広島市立五月が丘小)「紙コップの持ち上げに成功して良かった。また参加したい」



キビパンズ

- 菅野ほのか(伊達市立松陽中)「デザインはかわいくできた。モーターを回すのが難しかった」
- 佐藤亮介(福島市立渡利中)「試行錯誤を繰り返した。仲間との協力が第一だと思った」
- 今野涼雅(八潮市立八幡中)「自分の力で何かを作りたくて参加した。楽しさもあったが、完成時の充実感は格別だった」



BECOOS(ベコーズ)

- 高橋樹里(伊達市立松陽中)「うまく動かなかったが、仲間との協力の大切さが分かった」
- 石川真澄(八潮市立八幡中)「工学を学びたくて参加した。技術的にいろいろな課題が見つかった」
- 鈴木陸馬(板橋区立赤塚第三中)「上手に紙コップをつかめなかった。節電の難しさも感じた」